幾人、 菊屋伝 右 ۴ 衛 門 カと広 0 花 見船 小 路 は 土を 両 踏 玉 みま 稲 荷 の 下 が に 着 け て、 同 勢男 女十

力

0

した

「まだ薄 明る *()* じ やな 11 か 橋 0 上か ら、 もう *()* ちど 向 島 眺

め

誰 やらそんなことを云うと、 杯 やろう」 日 の 行 楽をまだ 堪ん 能っ 切 れ な

11

な

がら、

貪婪な享楽追及者たちは、

酒盛 て、 そ な P う ん つ だ洒落 は いちど橋 段 と れ 面 0 7 上 白 11 るぜ」 に引返そう、 かろう、 酒 が 残 人波 つ に て 揉まれながら、 4 る か 5, 歌筆 欄らん め

花 0 霞 れ 残る夕暮に な の 裡に、 事 を言 さながら金砂子を撒 11 な 大川の水面を薄紫に照して、 がら、 気を揃え いたよう。 て 橋 の上 に 引返 向島の た あたりは 0 で

と言 夜桜見物に つ た、 上 は 低俗 漕ぎ出る 水 0 な道 面 P 歌も、 見えぬまでに、 のでしょう。 今宵だけはピタリとした気分です まことに『上見て通れ両国の さんざめく 船と船 れ か 橋』 6

な ほどこ 11 つ は 洒落 れ て () るぜ、 サア サア 店を拡げたり拡 げ

たり

欄ん 干がん に 銘 々 の 盃 を置 e s て Z 女たちが 人 波に 揉まれ な が 5, そ

0 間 を 注 11 で ま わ ります。

水 肌 両 ま 玉 橋 で 0 上に 桃 0 は、 皮を剝む いろいろの物売りが陣を布 11 て垂らした時代です。 11 交通整 て、 橋 理 0 P 何 か 5

 \mathcal{H}

あ 立体図をそのまま、 たも 0 でなく、 橋 それはまことに、 下 0 船 0 中 の賑 いと呼 乱雑の中の秩序、 応 して、 庶 民歓楽の 無作法の

屋 は、 中 それに若く した老人ですが、 菊屋伝右衛門は、 番頭の孫作、 美しさとも言うべき見物で お市 人幸七、 て綺麗なところでは、 御近所の娘お六、 その女房で良 手代の伴造、 横山町 それを囲んで、 の大きな金貨 い年増のお角、 遠縁の清五郎、 した。 お舟のともがらを加えてざっと十 娘のお吉、若旦那の許嫁のお延、 欄干に猪口 隣 出入り を据えた一 五. 小 料理屋 の鳶頭文次、 族郎党 肥 ŋ

饗宴は果て しばら この放縦極まる酒宴を眺めて行きますが、 く薄れ しもなく ゆく夕明 つ づく りを惜し で した。 みながら、 往来の 差 へたちは つ押えつ、 当人たちはさら 欄ん 苦

©2017 萩 柚月

来 驚く様子もなく、 0 威勢の良 わざと突き当った () 悪口を応酬 しながら、 り、 押 盃 0 めしたりする往 酬 は、 お 互

顔の見わかぬまで続きました。

がて四方が真 っ暗にな って、 橋 0 Ĺ の 人波 もやや 班だら

菊屋 の 同 勢もさすが に 酒も興も尽きます。

「さて、そろそろ帰るとしようか」

か 主 0 大き の伝右衛門が声を掛けた時でした。 *()* 团 体 揉みに揉んでドッと本所 花見帰りら 0 方 か 5 e s

「危ない危ない」

襲って来た

のです。

「退いた退いた」

除 ける間 もなく、 菊屋 0 同勢を押し 包むように 揉んで、 西 両 玉

の方へ、どっと引いて行きます。

「何んということだ」

ずいぶん乱暴な人たちねエ」

女達が不 平 たらたら、 衣紋や髪飾りを直 て いると、 主人 の伝

右衛門が、

「ウーム」

恐ろしい う めき声とともに、 ガクリと欄干 0 上に崩れ 折ぉ れ た 0 で

す。

「旦那、どうしました」

それを抱き上げるように 覗き込ん だ の は、 番 頭 の 孫 作 隣 家 0

王人――柳屋の幸七でした。

灯だ、 旦那がどうかなすったようだ」

幸七が声を絞りましたが、 さてここに灯を用意し 7 () る筈もあ

だが、 遠縁 の 掛^かか り人清五郎と、 鳥頭 の文次は早く も橋番 駈

け て行きました。そ 0 間 に 柳 屋 の幸七

旦那、どうしました。 気分でも悪 んで す か、 且

後ろから抱き上げると、 何やらぬい 5 りと手 に付 P 僅 か

残る薄明りにその手を透して見ると、

あ ッ、 Щ

つゝ た 0 P 理 は あ りません。 両りょうて か 5 腕 か け て、 生

と り。

と孫作。

何

?

<u>í</u>?

大変ッ、 旦那を突 (J て逃げ た 奴がある ん だし

幸七は年 甲斐もなく ひどく 取 乱 てお りまし たが、 思 11 直 た

様子で、

灯だ」

提灯を持 つ て行く人 を呼びか けます。

だが、 この 時 代 人 は ひどく 掛 り合 e st を恐 れ た b 0 で、

容易でな いと見ると、 一度集った弥次馬も、 バラバラと逃げ

なってしま います。

仕様 が な いなア、 怪 我 人 が あ るん だ、 灯を貸し て下

逃げて行く二三人を追 掛 けた幸七は、 五六間も追っ 駆 けて、

ようや 提 灯を 一つ借り 7 来ると、 惨憺たる現場が マザ 7 ザと照

あッ 旦那」 らし出

さ

れ

る

0

で

した。

で確り して下さい 旦 那

4

残る 息 人 伝 があろうとも覚えず、 番 頭 だ 右 の孫作 け 衛 です。 門 は、 بخ 柳屋 塊い 0 ボ の 幸 生 口 七は、 命 屑 の最後 のよ 左 う 右 0 に 痙ゖれれん から抱き起 干 が、 に 蹲す 僅 < しま か ま に つ その て、 した が、 もは 깯 肢 主 に

ま 屋 板 반 0 0 傷 上 ん 同 は 勢だ に 左 流 0 胸ら け れ で、 てお しく、 ります 其処にはそん そこ が か ح 5 な 噴 0 大そ 凄ま 出 れ じ た た 血 *()* 事をしそうな顔 光景を取巻 は 下 半 身 を く 染 0 め もあ は 菊 橋 ŋ

退 (J た 退 e s た

それ 0 そ 辺 ح 防次馬 を 駆 縄 付 張 に け 0 た 隊 て、 0 は、 でした。 花時 清五 0 郎と文次を案内に、 警戒に当って e s たガラッ 橋番所 八 の役人と、 0 八五郎、

ざ つ ع 斯に 6 な 事ですよ、 親 分

お 静 0 0 心 晚 尽 遅 Ù を報告す く 0 暖 親 か 分 e s 0 銭形 晩飯を掻込みながら、 す。 平 次 のとこ ろ ^ 辿^たど 両 り着 国橋 11 0 た 八 に 五. 起った、 郎は、

 \boldsymbol{b} 弥次 八馬 0 中にうさん はどうせそ な奴でも 0 辺 に (J 7 な ゴ か マ ゴ つ た ち 0 か ゃ 居 ま 11 が そ れ で 怪奇な殺

ĺ

る

0

で

怪 平 次は と言え 相 変らず粉 ば 皆 煙草をせせ λ な 怪 りながら、 4 が、 怪 く 乗 な ŋ 出 e s と言えば、 気 味 で 皆 W

な 怪 な *()* 0 で

心 細 11 な ア、 そ んな事 や、 13 つまで経 つ て も星は 挙 が 5 な

11

例えば、 現場に 何 に か捨 てて行 つ た bの でも な か つ た 0

カ

もあ 「 と 首 ち ŋ 0 鞘さ すが が一 木、 それ 蠟る 塗り が 0 六七 あ ŋ 間離 š れ れ た た 品 橋 で、 板 あ 0 W に な 棄 0 て は て 何 処 り で

した」

「何方の方へ離れていた?――」

西両 玉 0 方 六 七 間ですよ 尤もあ 0 人数 Þ 0 先

掛って動いたかも知れません」

匕首 0 鞘 は真 つ すぐ か、 曲って e st る 0 か

かな ŋ 曲 9 て いますよ、 ちょ いと不気味なやつ で

ŋ 強 4 鞘ゃ なら、 人に 蹴られても、 わざとやったん で な

そんな に 遠く 転 がって行く もの じ やな €√ ___

そ

に

しちゃ

匕首

の

な

11

0

が変じゃあ

りませ

ん

か

曲

者

は

0

だけ て、 血 染 0 刃物 を 持 つ て 逃げたことにな ります が

ガラ ッ八もな かな かうま い事に 気が 付きます

Ш 放 ったん だよ 欄らんかん 干ん の 下は大 沠 が 流 れ て 11 る ん だ。

呑 ん だ つ て、 ビ クとも するも

゙なるほどね」

ところで、 殺され た主人 の隣 に は 誰 が () た ん だし

隣 は 菊屋 掛か り で 遠 縁 0 清 五 郎 右 隣に は 柳

が たそうです。 清五 郎 の左は五 人の若 4 娘たち、 幸七 0 右隣に

は、 頭 中 に 0 孫 作 手 や、 が 鳶頭の文次、 11 ると、 まず 誰 手代 0 思う」 伴造などが e s たようで」

「両隣にいる清五郎か幸七ですね

は 真 つ 先 K 疑 11 が か かるわけ だ

すると、 下手人は離 れ て いた 奴 ですね

そ う 物事を手 きめ て は 11 け ところで、 身体 血

のつ e s ている の は誰 と誰だ

どく 幸七と孫 若 () 作 女どもを除 は 死体 を抱き起し け ば 少しず て つは皆 41 ますか ん なが ら、 付 ح 0 11 て 人 W ま は たよ」 番 ひ

ほかに気 の付 (J たことはな e st のかし

それ つきり で

ぉ 前 に しちゃ それ でも行 届 11 た方

お前 に しちゃ 少しばかり斜め ですかい、

Ŧī. 郎 は ·です。

不足ら 11 顔をするな」

を向

e st

て

e s

るか

血

が

何

処

^

どん

な具

合に付い

て

 $\epsilon \sqrt{}$

るか

ただ

念入 りに 調 べる者な 5 傷 \Box 0 勾配い -ことに匕首 0 刃 は 何 方

付 いただけでなく、 飛い沫ぶ いたのはな いか、 そ の 日 の花見で、 どん

な人 に逢 つ て いるか、 誰 か 後を跟け な か ったか、 始終見 か け た 顔

は な 11

「まだあるよ、 けて、 ح e st つ は 番 大事なことだ ら、 が、 両 玉 稲 荷 0 下 舟

をつ

度陸

に

上

が

つ

て

か

暗く

な

ると

e s

う

0

に

両

玉

に引返 して、 橋 0 上 か ら向 島 の遠見の花を見ようなどと酔 興なこ

とを言 e st 出 しだ の は 誰 か それを訊きたか った ん だし

エ

その通りで、 ガラ ッ八はまさに 応急所急所は突っ込んだつもりでも、 言もあ りません。 な る ほどそう言 平 次 わ 0 眼 ると か

ら見ると隙だらけです。

梃 ま の主さ ア 宜 そこまで行届けば、 ところで菊屋伝右衛門 お前 b は 商売柄う 本立 0 御 んと請方の怨 用 聞 十手

は買っているたろうな」

平次は話題を転じました。

町 ょ P う 内 判 な 0 義理 のよ 取 11 立 で とか、 しょうが、 < てをす な 11 氏神の祭礼などには、 親爺ですよ。 るくせに、 恐ろしく 妙に慈悲善根が 利息 唯 0 金貸な 0) 高 恐ろしく奮みやがるんで」 () 金を貸して、 5 あ つ んなに人 たことが に 血 好 憎まれ 0 つきで、 出る

フーム

ませ、 け 氏 神 檀ん 四 の玉 那寺でら 文で済むと 垣を寄附 の鯨幕 ころを、 す に P る 自分 時 b 十二文と出 の名が入 親 柱 Ŧ. 木 って す に 菊屋伝 ん 4 る だそうで」 右 衛 時 門 0 鐘 0 名 刻ぎ

妙な道楽だな」

船 贅 ゃ 欲が を 沢 つ 出 深 す 真 町 0 似 e s は、 内 くせに、 をする 中 へふ 江 戸 れ 広しと雖も菊屋の 人によく言わ 廻さしたり、 金貸しの 癖 に れた 初っ 金 解魚を買いがっま の 伝 i s あ 右衛門ば ん るに任せて、 ですよ。 つ て、 かりだろ 乞 花見 恐ろ 食に 米 屋 を

て評判ですよ」

れ が あ 雖 つ の地 と来た ですよ、 ね、 ^ どこ ッ で ^ お ッ 前 は そ ん な学 を仕 入

良 11 気 な P ん だ そ の怨ん で 11 る 者 0 中 で P う ん ん で

いる者は誰だ」

面ら 伜 は 0 良 勘当さ 4 人 間 れ は て 潮た 家 中 0 11 者 る か ら怨まれ 許嫁け 0 お て 延は 4 るに 決 下 女 つ 0 て 41 ます

け落 嫁 7 コ キ に ち Þ 給 使 した わ ら れ れ 0 るこ な 0 て を *(y* 11 とに 引戻 奉 る 公人 さ な 居候 見 れ つ て て た 4 11 0 清 $\stackrel{-}{\longrightarrow}$ る に 倍も **F**i. 働 郎 か 年に は せ 嵩さ 娘 る 0 0 金 お 吉と 持 娘 0 0 · 娶合 お 親 お 吉 爺 は 0 せそう

「たいへんな親爺だな」

ます 金 てら まだあ を ょ れ 預 て。 つ りますよ、 たきり 三百両から吐き出させられ、 返してく 番頭 の れそうも 孫 作 は な うん i s 0 と溜 手代 に め 0 ビ 伴 込 造 W を だ は 切 + 0 を 5 年 発は 越 き立

「なるほど、珍らしい因業だ_

後生 は、 そ が で れ 良 つ で か 自 11 で 分 4 札 だ を建 ようよ」 け三 て 度 させ 0 膳 る に 贅 0 ば を 尽 か り 見得 て、 河 に ん ع て 4 か る 様 ん ^ だ。 寄 附 さぞ て

度が よく 郎 は よく ひ ど 気に プ 入ら IJ プ IJ な か て つ た お ŋ 0 ま で す。 う。 菊屋 伝 衛 門 0

=

家 ŋ 気 中 分 0 者 主 日 0 あ 平 0 次は 主 伝 る 人 右 0 を平次は 衛 対 門 八 <u>F</u>. す 0 郎 遺 る 見 反 骸 感 を 0 11 が 0 納 つ しません せ め て ょ 4 に横 か、 で 何 山 11 ん 町 0 た。 とな 支 0 度 菊 屋 を 大 覗 々 騒 動 11 11 7 見 お す

8 5 調 つ 番 べ た 0 平次はまず主人伝右 孫 0 は 作 胸 Þ 0 傷 手 代 П だ 0 け 伴 造 衛 刃 0 門 追 0 先 0 従 関をす が 死骸を見せ 上 0 方を向 る 0 て貰 を 宜 11 11 て 41 ま 加 11 した。 る 減 0 を確 尤もっと

め そ れ 以 上 は 見ようとも

「これは何んでしょう、親分」

ガ ラ ッ 八 0 八 Ŧī. 郎 は 仏 様 0 前 に 飾 つ た 机 0 に、 供

えた三 方 0 上 の 包 み 金 に 気 が 付きまし た。

小 判 0 ょ う だ ね。 11 ら 仏 様 0 大好 物 で Ŕ お 棺ん 0 前 小 判 を

飾るのは変だね」

銭 平 次も ح 0 判 じ 物 に は お ど ろ *c y* た 様 子 で す

エ そ れ は 小 判 で Ŧī. 十 両 ござ $\epsilon \sqrt{}$ ま す。 変 な備え 物 で す が そ

れには少しばかりワケがございます」

番頭 孫 作 は 尤 ら () 調子 で 口を容い れ ま た

三さんず Ш 0 渡 銭 な 5 六 文 ح 相 場 がきま つ 7 11 る 五 両

あ ŋ Þ 憚 り なが ら 間え 魔ま の 庁 が 素通 ŋ だ

「黙っていろ、八」

ヘエ」

平 次は 八 五 郎 0 不ふ ·謹ぇ 慎ん な 舌 0 動きを 留 め な がら 続 けまし

「そのワケというのは何んだ」

お 隣 ŋ 0 柳 屋 0 幸 七 さ λ が、 昨り 夜~ ع 4 う 昨 夜 不 思 議 無 尽 が

つ て 五 両 0 金 が 入 つ たそうで、 ح 0 家 0) 主人 は 古 61 りが

あ

つ

て

毎

日

気

て

4

た

が、

死

ん

だ

0

を宜

いこ

ع

に

て

払

わ

な

わ れ ち ゃ 仏 様 に 対 ても済ま な 11 か 5 ځ 先 刻 わ ざ

持 つ 来 て お 線香を上 げ な がら、 仏様に供 えて行きま た

も知れないのに」

そ

つ

は

古

()

こと

だ

ね

黙

つ

て

た

5,

知らず

に

済

6

だ

か

八五郎はまたさもしい口を挟みます

11 帳 面 が あ りま す か ら、 黙 つ 7 11 て \boldsymbol{b} 帳 消 に な わ

け

じゃございません」

番頭はまた番頭らし いことを言い

「ところで、菊屋の身上はどうだ」

平次は問いを変えました。

たものでございます、 現 金が三千両、 貸し 金が 万 両、

地所家作は二三十ヵ所もございましょうか」

「家督はどうなる」

いずれ 潮来から若旦 那 0 伝 ᄱ 郎 様 を お 呼 び すること な ま

しょう」

すると、

主人が死んで

番喜ぶ

0

は誰

だし

孫作は黙ってしまいました。

「あれは誰だ」

中 背 良 *(y* 男 ―二十三とも見える 0 が、 何 Þ ら道 具を持

土蔵から出て来ます。

清五郎と申します。 亡 く な った主・ 人 の遠縁 の者で」

「ここへ呼んで貰おうか」

ヘエ」

孫作が行 つ て 何やら囁やくと、 清五郎 はちょ っと眉 を ひそ め

たが、 思 11 直 た様 子で此 方へ Þ つ て 来ま 男 つ 振 ŋ の良

11 似ず、 ひどく 不機嫌な顔をした男です。

「御苦労様でございます、親分さん方」

挨拶だけは、思いのほか丁寧でした。

ゆうべ両 国 の 橋 0 上 で 番酒を呑 んだ 0 は誰だえ」

平次の問は予想を絶します。

「鳶頭でござい まし う、 幸七さんもよく呑んで おりました」

「呑まないのは」

「男どもでは私が下戸で」

「その代り酌でもしたのか」

酌 お 市 がやりま 幸七さん もす つ か り浮 か れ を

していたようで」

橋 行 って、遠く か ら花見をしようなどと、 酔ないきょう な 11

出しだのは誰だえ」

たよ ーそ う です。 つは わ 皆 か んな飲 りませ み足 6 が りな か 誰 つ か 言 たん e s ですね」 出すと、 も 二 も な か つ

郎 0) 表情 は よう Þ く B ぐ れます。

お前 は 主 人を怨ん で いたというが本当

平次は短兵急に突っ込みました。

で (J た わ け じ ゃ ござ いま せ ん が

清 五. 郎 0 顔 にあ りあ りと苦渋 0 色 0 表わ れる の を、 平 次は 見 0

がす筈もありません。

e s て 手 代 0 伴造 に b逢 つ て 見ま た が。 ح れ は 十 兀

利 鼠 巧 0 な ような 0 か 。 男 で、 一向平次に要領を得させませ 何を訊 いても ヘラ ^ ラと笑うだ $\bar{\mathcal{k}}_{\circ}$ け 馬 鹿 な

主 を 怨 む者? 飛ん でもな 11 家 の 中に そ ん な 人 間 が あ

P 0 すか、 貸 金 の取立てこそやかましい 人でし たが 慈悲 善根

11 てお りま た、 工

لح

人

一倍はずんだ方で、

奉

·公人

たちも皆

6

な心

か

5

お慕

こんな事をヌケヌケ言える男です。

娘 0 お吉は二十歳というに しては初々 しくさし て美 は あ

房

角を物蔭

に

呼

んで見ました。

て、 りませんが、さすがにたった一人の父親を喪った打撃に萎れ 何を 訊 いてもは か ば か 4 答えもありません

て 分のな お 勘当された若旦那の許嫁お延 りま 娘 でし す。 い働き者らしい女でした。 たが、 下 女 屈従う の お の生活 市は三十 に は · 過ぎ、 馴れて、 つ歳下の十九、 至って平凡な 何んとなく 明 ح れ るさを失 その は 可 愛 5 つ

昨夜、 両 .国の橋 の上 へ行こうと、 さいしょに 誘さ つ た の は誰だ」

聞 お延とお市 は 妙に顔を見合せておりますが、 容易に言お

女どもを集めてお

11

て、

平次の最初

0

問

はこうで

した。

それを

うとはしません。

そ つ は大事なことだぜ、 橋 0 上 ^ 誘さ 11 出 て 主 を殺 気

注を入れたのは八五郎でした。だったかも知れないからなア」

黙って居ろ、八」

うだけ 平次 は ま 驚 事を言 つ いてその つ て П ま を塞ぎそうにしましたが、 そ て女ども は 田 螺 し 八五 ょ 郎 う は П う言

四

知らず、 0 近所 の娘、 は 最後にちょうど菊屋 番 お舟とお六にも逢 11 観察者 0 に 地 位 Þ つ て見ましたが、 に つ て来た、 11 た筈 0 隣 柳 0 屋 これ 小 幸 料 理屋 は 七とそ 何 で 6 にも

亭 主 の幸七は 四十 五六、 小意気な華奢 な男ですが、 何 となく

抜ぬ け 直 者 0 らし た い愛嬌者で、女房 三十七 八の、 年 のお に 角は て は 小 少 料 理屋 色 つ 一の女将の ほ 11 女 5 で す。 垢が

銭 形 0 親 分さん 御苦労様でござい ます」

幸七は如才なく小腰を屈めました。

五. + 両 0 大 金 を 仏 様 の前に供 えた ん だ つ て ね

から、 て下 られま ヘエ、 す つ 年 せ た お 越 恥 0 かし に 融り 通がい 無 尽 ことで。 て で Ŧī. 頂きました。 新店 両 ح で資本を入れ過ぎて、 e st う 他様ま 金 が ょ 入 り つ た は利息も の を、 安く 菊屋 黙 つ さん 廻 7 は

「この無尽は?」

来な 兼ね で、 町 ので、 ま た か 内 った った 0 た 無 一と晩 尽で、 ^, の 0 が で、 残念でござ <u>^</u> の違 無 ゆう 尽 べ 0 () で 発会に の 籤じ います。 菊屋 引ぎ 女房が参りました。 でござ の御主人に喜んで頂 いま え、 あの騒ぎで、 た。 意 女は 地 < 0 私 悪 妙 ع は 11 出 n

と言った調子です。

ろ で 昨 夜 0 両 玉 0 騒ぎ だ が お 前 に は 少

人の心当りはないのか」

一向気が付きませんが――

なく 向 で 後 日 で 中 思 後を i s 合せて、 跟 け た 者 幾度 が 無 b か 幾度も つ た 0 土手 か で逢 そ 0 時 つ た は 顔 気 が 付

のはなかったのか」

次の質問はさすがに巧妙でした。

平

意気なる 「そう 男が、 です ね、 幾度も土手で摺れ違ったようですが そう言えば、 一人、若 e s 男が 頬ぉ 冠む 背 りを 0 高 た 11

三十前後 の 私どもが船へ乗って帰るときまで、 執念深く土

手から見送っていたようですが――」

幸七の記憶は次第に喚び覚されて行きます

「その顔を見なかったのか」

「なにぶん頬冠りをして、 顔を反けるよう に してお りまし ので

尤も、あの背の高さは並大抵じゃございません、身体 0 恰 好

にも、 見覚えがあるようですが、どうも思 e st 出せません」

他に誰か、 その男に気の付 いた者はな *()* の かな、 家の者 は

かく、――鳶頭などはどうだろう」

「皆んな浮かれ切っておりました、 殊に鳶 頭は虎に な つ て、 往 来

0 人をつかまえては盃を差して いた位です か

幸七は覚束ない顔をするのです。

有難う、 そい つ は大変役に立ちそうだ、 ところで、 ゆう べ 西 両

玉 船をつけてから、 もう いちど橋の 上 **个** 行こうと言 e s 出

は誰だ お前が一番気が付いたそうだが

「そいつは——」

「女ども ことに下女 の お 市 は 知 つ て i s たそう ·だが、 言 わ

よ

八五郎は口を入れました。

郎 さん いやあ の人は呑 ん で e s な *c y* 鳶頭だ つ か

れませんね、まだ呑み足りない顔をしていましたから」

「そんな事で宜かろう、 ーいや、 足留めをさせて気の毒だ つ

――八、鳶頭を捜して来てくれ」

八五郎が、 平次は幸七夫婦に別れて、 鳶頭の文次をつかまえて、 庭の方へ行きました。 話の口火を切っております。 そこにはもう

そ

ん

な事

か

柳 出 屋 狭 0 *()* 庭 お 厳 膀 で、 重 手の な忍び返 せせこまし 煙 Í, 物干台 を打 い植込 つ が た黒板塀を隔てて、 見えてお の上へ、 ります。 土蔵の の庇と物干・ 近々 ع 台が突き 隣

来^z 鳶 頭 11 る に 聴 勘 くと、 当され た若 菊屋 旦 0 関 那 係 0 伝 の者 四 で、 郎だそうですよ」 恐ろしく背 0 高 11 0 は、 潮た

 \mathcal{H} 郎 は 早くも先を 潜 つ てお りました。

頬冠 そ の ŋ 若 を 且 那 て 11 0 姿を、 たそうだが」 きのう 向島 0 土手 で見掛 け な か つ た か 13

5 な 釣 ら 供 見 包 は 間 か 酔 あ けま で 0 つ b 遊 つ て しで わ せん び友達 11 か て した ね、 りますよ」 bよ。 若旦那を見落すようなことはありませんよ 一と言 あっしは若旦 若旦那が っちゃ失礼だが、 向 島 一那とは に 11 たも 仲 何 良し 処 のなら、 へ行 で ね く 三丁先か 少しく

こんな事を言う文次です。

潮。 来に から、 江戸へ 帰 って来た様子 は な 11 0 か

入 母ば 来るよう つ 0 可哀想 て来る です で に す、 でし か ら、 年 越 ょうよ ときどきは し潮来に島 親旦那 がなく 流 御 眼 し な ح で すが れ ぼ ば 今度は大ぴ で。 預 お けら 延さ れ 5 ん て に 居 0 顔 る を 0 は 見 乳ぅ

すると、何だって勘当になったんだ」

絵 仲 何 が 共処まではこちとらに 百 良 両 せに、 費 雑ざっ 俳い 4 込ん 道楽が過ぎたようで Þ だり、 る、 は ح とに芝居 ひ わ 4 か きの りませんが、 役者 狂き 気が が に 女道楽じゃあ 大変で、 引幕を送っ 延さん 素 た 人芝居をし りません、 と滅法

平 次は少し呆気 に取られた様子です。

れた若 あ 旦 な結 那 つ訊きた 構 は な 神武 若 旦 11 が、 那 天皇以来初めてだろうって は 昨夜、 あ りませんよ。 両 国 橋 へ引 女と洒 つ 返そうと言 『が大嫌 町 内 の噂 *()* W で勘当さ ですよ」

の は、 誰 だえ」

b

う

か言 あ つ しだ 出 たん ったかも で、 あ れませ つ しも ん つ いそん ょ、 な気に 11 Þ 待 な つ つ て下 て、 真 さ 4 9 先に ょ 誰

引 返 た が

そ の言 い出 したのは 男 か 女か

男 で すよ -ハテ、 誰だ ったかな」

頭 0 記憶もこの 辺はす つ か ŋ が朧ろに な り ź

平次は後 のことを八 五郎に 任 せて、 11 ち おう 引揚げることにし

ました。 それを追っか けるよ うに

潮 来 人をや って 見ません か。 親

ガ ラ ッ八もそこまでは気が付きます。

の見当 Þ って では、 見ようと思う 橋 0 上に 残 った奴が下手人 が、 そ e s つは たぶ に 間 違 ん 無駄 11 あ るま だろうよ () 思う」 俺

ヘエ ?

「向島 の土手 で、 菊 屋 0 同 勢 0 跡をつ け 廻 た 間 が あ る 7

P, 屋 同 勢が 船 で 両 玉 ^ 着 11 て、 す ぐ 引 返す とは 気 が 付

心 引 た 者 返 す な 5 術で bあ 先 ŋ ^ ます 廻 つ て 両 玉 0 船 着き場 で 待 つ て 橋 ^ 11 つ

八 郎 は b う つ智恵を絞 りま した

頬冠 ŋ 0 男は 船 が 出 て からまで、 向 島土手 で見送 つ て 11

たと

が 宜 船 11 うぜ、 着 場に e s 来 そ れ る 工 から人混 夫 は な み 11 の 中 を 嘘だと思うなら、 駈 け 出し て、 船よ 試た り先 に に Þ 西 つ 両 7 見 玉 る 0

「なるほどね」

P 明かです。 う言 わ れ る 頬冠 り 0 男 が 下 手 人 で な 11 は、 あ

五

そ の 晚、 通夜 の席 **∼**∘ 菊屋 の伜伝四郎は 帰 つ て来まし た。

ので、 親 0 変事 言 4 を聴 付 け に *()* て は反きますが 駈 け付けました。 <u>_</u>, 三日前 皆様、 から江戸 有難うございます」 来て いた

近所の衆や親類達 ^ ていね いな挨拶です。

な どがある つ て、 何 わ < 無 けもなく、 れと指図をしております。 理 な勘当と知 その場から伝四郎は指導者とも喪主 って いるので、 それ を非 難 す る な

伝 四 そ 郎 れを の妹 迎えて一番喜んだ のお吉も、 不幸中 0 にホ は許嫁 ッとした様子です。 のお 延で、 掛か ŋ 人ど の 清 郎、

残 け 夜 ŋ が で 変死 つ てお茶番を 残 近 りま 所 れ 0 0 て、 した。 衆は ことですから、 して 帰 他愛 それも夜中 し、 bいた下女のお なく 裏表 世間 0 過ぎは 戸 居 \boldsymbol{b} 眠 ^ 市 の 締 9 b 眠る人が多く、 めさし 聞えも如何というの て お 夜半過ぎに り ま て、 た。 あとは な お ると 勝 近 手 で、 11 す 親 類だ 半 9 か 通

度を千伝うお延で 朝 一番先にお勝手 した。 ^ 来た のは、 11 つ P のように 朝 0

支

で お りま 竈ぃ 味 b な 姿態 そ た れ れ は決 に るように、 な つ て て た 下 る だ 0 女 0 で 居 0 す 眠 お 市 ŋ は で 変 は な な 恰恰 娐 を 何 な て 崩 折 自 7

た ゃ 表 近 情 は づ () 凄まじ 蛇 て 見 0) ょ る ٤ うな e s ことに なまだら 僅 0 か 紐 す に 漏も ぐ 気が れ 前掛 る 付きます。 朝 0 0 真なだが 光 0 ... 紐も 中 で その な は が あ 上首 5, ŋ ません に お 巻き 市 0 顏 色

あ つ お 市 さ が 誰 か 来て下さ

お 延は 悲 鳴を あげ て しま いました。

何 だ 何 ん だ

う 0 家 て 来 泊 た つ の て、 は ` 様子を見 通 夜 0 人 張 た つ て *()* 真 た つ 先 \mathcal{H} 郎 に 立 で 9 た 0 B

騒ぎ は 瞬 に て煮えく り 返 りま た

つ 戸 を 開 け る ん じ ゃ な 11 鍵 が 掛 つ 7 11 か

お勝 手 を 開 け ようとし た清 Ŧi. 郎 は 五. 郎 ŋ 飛 ばされ ま

た。

締 つ て は 11 る が 輪ゎ 鍵が が 掛 つ て 11 ませ ん ょ

待 9 7 < れ 俺 は ち ょ 11 と戸 締 りと 外 廻りを見てく 後

は 番頭 さ ん 頼 むぜ、 第 一番は医者を呼ぶんだ」

<

極 ^ 廻 り た。 体 \mathcal{H} は 郎 もう冷 金 貸 は 水 0 戸 た 下 締 ・駄を突 り な ら つ つ て か 11 、裏も表 け て て、 呼 P 裏 び 生ける術 水 П 戸 か らグ b 輪 ル 鍵 IJ な 見

0 締 ŋ で、 鼠 兀 入 れ そ う bあ ŋ ま せ 6

5 真 仰 新 と 土 11 忍 蔵 び 0 返 壁だ けを残 が 中 空 て、 に 無気 あと 味 な は厳重 尖端 を並 な 黒 べ 板 塀 7 菊屋 を め 0

安全を保証しております。

Ш 店 11 る 方 か 者 らも П わ は Ŧ. け 郎 お です。 勝 は 奥からも。 ツイ鼻の先には、 手 大急ぎでお から入 つ そ た 勝手に取 0 のでなければ、 関所を通らずにここへ入る道理はなく、 お通夜 って返しました。 の人も七八人いたのですから、 お通夜の人の中に交って そこか ら奥 へは

に た な がら、 は家 が ま 冷た なく、 の者と泊 無気味な **<** 町内 な り客が つ た 時 0 木 が 死 経 道 全部で十数人、 体 つば ではどうしようも) 内 科 か 医 り でした。 が 坊主 お互に白 一頭を先 なく、 e s 眼 に 医 者 立 で 見 て 0 張 帰 て 来 り つ 合 た ま 後

た赤 形 平 そ 次 坊 の か 顔を見た時 ら 0 よう 半 刻 に ば 朩 か ば ッ ŋ としたことです。 か 0 後、 りは、ガラ 使 *()* の者と ツ八 0 (J 八 つ 五郎、 よに 母 飛 親 W で 0 顏 を見 銭

エ 何 面 ん とし 目次第もあ たことだ。 りません、 お前が見張っ お 勝手 て 11 て

が 付 か 郎 な か 0 腐さ つ た つ ん た顔 で e st う は でワザをするとは気

六

お 前 が、 泊 ってい たお蔭で、 後 0 調 べ は 助かる だろう。

どんな様子だったんだ、詳しく話せ」

う話 平 次 か は け そ まし れ で た。 八五郎 の 腐 つ て e st る 0) を引 立 てるように ح

御通夜に は 何 んの 変り もありませ $\bar{\lambda}_{\circ}$ 夜 中過か らは お 市 b

顔を

ま 出 さなな つ ま た たよ。 か ったし、手洗に立った人の外には、 気の置ける人もいなか 御近所の衆と、 通 夜 つ の坊主は宵 たんでしょう」 皆んな居 のうちに 眠 帰 りをして

「小用に立ったのは、誰と誰だ」

度 や二度ず つは皆んな立ちました」

「それから」

<u>Fi.</u> 郎 はそれ に 応 えて お 延が 死 体を発見し てから、 内 外 0 締

りを見て廻った事を話し、

医者が来て、 殺されたのは 丑ゃ 刻っ (三時) に <u>H</u>: 刻半 (三時) ょ ŋ

は遅くあるまいということです」

「私のでございました」

「首を

締

めて

4

、 た 前

掛は

ガ ラ ッ八に、 ジ ロリと顔を見 られ ると、 清五 郎 は 尻を引 つ 吅 か

れ たようにあ わてて名乗って出ま した。

親 分さん 清五郎に 間違いがある筈は あ りません、 そ れ は

私が引受けますが――」

を したの は背 0 高 *(y* 男 で、 何とな 0 家 0 空気

ぐわぬ寛達な風格でした。

「お前は?」

申遅 れま た、 私 は 家 0 伜 0 伝 四 郎 ござ 4

| そうか、 お 前 は清五 立郎を 庇 いた 4 0 か

「庇うわけ じゃ ござ いません が 清五 郎 は 良 11 男 で ござ ま

す。 うな馬鹿な下手人もな は 無二 の 仲 で、 いだろうと思 そ れ に、 自 分 います 0 前 が 掛 で 0 首 を締

伝 四郎も少 し出過ぎた のを後悔して いる様子 ですが、

か

頭

P \$ 勘当息子らしくな い良 e st 男です。

お 前 は 昨 日向島 へ行 か なか つ た の

平次は全く別のことを訊ねました。

いえ、 どこ ^ も参りません」

どこに居 た ん だし

事で暮 で、 さればわ 橋場 日 の友達 | 碁を打 ま か ります たが、 の家に ったり、 お 二三人好きな りました 木を読え λ だり、 0 が 露っ 友とい 集りまし 無駄話を う俳諧をやる たかか した 5 ŋ お そんな 聞き下 男の家

う。 日 菊 ح れ 屋 は 結 同 構過ぎる 勢を見張 ほど結構な不 つ たと いう、 頬 在リ 証バ 冠 ŋ 明ィ 0 で 男は す。 する つ ٤ た e s 誰 向 で 島 しょ で

お延さん に訊きた () が

<u>イ</u>

の後 ろ に 小さく な つ て 4 たお延は引 緊ま つ た可愛らし () 瀬を、

朝 の 光 0 中 に 出 しました。

お 市 は ゆ う 何 に か言わ な か つ た 0 か

いえ

咋 日 両 玉 橋 に 引 返そうと誰 が 言 4 出 た か お 市 はそれ

を 知 つ て 4 た ع 思 <u>ځ</u>

平次は (J ょ 4 よ最後 0 間 いを 投げ かけた のです。

変る まア言 「 え、 幾度 b わ 知 な れ も私 11 な 方 が 11 K が 無 何 事 に だろう、 か言 ٤, e st とうとう言わずにしまいました」 度そうにし 明 日 の天道様を拝んだら ていましたが また気が まア

フ

平次はひどく残念そうです。

分、 手掛りはそれです つか りなくなったわけですね

八五郎は、 狭 い庭に降り立った平次の後を追 って来ました。

11 手掛りはうんとあるよ、 鳶頭が来たようだ、 もう つ

あの男に当って見よう」

何を当るんで? 親分」

「まア、 黙 って来るが宜 € √

木戸を出ると、 忙しそうに入 つ て来た の は鳶頭の文次です。

お早うございます、 親分」

たいそう早 いんだね、 鳶頭、 さっそく だが 訊きた e st

あるが」

ヘエ

「菊屋の主人に女道楽はな か った 0 か

平 次 間 11 は 相変らず八 Ŧi. 郎 0 予 想を絶 します。

「あ りましたよ。 あの年で、 そ の病気があるんで、 ずい تخ ん諸方

の怨も買 ったようです」

近 いところでは?」

大きい声では言えませんが、 お隣 の柳屋の女将 あの 通 ŋ

色 っぽ 化けそうな大年増でしょう、 尤もあんな具合に持ち

か けて、 -そんな内証事まではわ 元手を菊屋から融通 さして居るんだとも言いますがね、

か

りませんよ」

よしっ、

ヘエ」

下手人は わ か ったよ」

誰で」

「あの忍び返しを越して来た奴だよ」

「ヘエ?」

ぜ な 向 5 11 板 う 間 でな 物 半 干しから、 位 丸太でも渡れるだろう。 な b 0 だ。 此 方 忍 0 び 物 返し 干 しへ 0 上を楽に 板を渡 物干台から物干台 越せるじゃ たのさ、 達者な奴 ^ な せ か

一間くらいの板か丸太があったら」

平 次と Ŧī. 郎 は 隣 0 柳 屋 ^ 飛込みま た

噌汁を啜 は つ て か いる幸 七 朝 夫 0 婦 膳 0 ^ 太 差 平 し 向 無事 W K な姿がある な つ て、 だ 寛かん 々かん け ح 暖 間 か 以 11 味

0 板 も丸太も見付から な か つ た の です。

早うござ () ます、 親分さん 方、 何 か 御 用 で

幸七 0 ケ ロリとした顔には、 **喃**ぅ が笑と侮辱が パ 1 7 11

るではありませんか。

平次は黙って裏口へ廻りました

八

二間 以 上 0 B 0 は あ り ませ 6 ね、 親 分

干物 竹 じ Þ 猫 0 子 が 渡 る 5 61 0 b 0 で

八五郎はまた無駄を言っております。

八、この鋸屑はどうだ

次は 新 11 土 に 交っ て 塀 0 下 に 掃き寄せら た夥 11 鋸屑

を見付けたのです。

「ヘエ」

八五郎の感の悪さ。

つ三つ に 引 つ 切 つ た板 か 丸 太がある筈だ、 搜 て見ろ」 引

返

して

あ

ん

な事を

した

上

提灯を往

来

0

人

か

ら借

ŋ

る

鞘ゃ

は

Ŧi.

六間

先

の橋

の

上

に捨て、

匕首ないくち

は

Ш

^

投

り込

 λ

だ

0

だろう。

ならあ りますよ。 四寸角 0) 材木が三木、 皆んな 四五 尺

すよ。 物 干 か 5 物干 は 届きま せ 6 が

<u>F</u>i. 郎 は 縁 0 下 か 5, 三本の材木を引張 ŋ 出 しまし

「それだ」

「切口が泥だらけですよ」

帰 じ 包 Þ つ な 11 来 を *()* 嗅 か て す () で ぐ そ 見ろ、 鋸っ 0 材木 で引 新 ・で物干・ 切 しい木 つ た 台 0 だ。 0 から物干台に渡 匂 e st 恐ろ がするだろう。 しく智恵 つ て の 菊屋 働 泥 b 野 に行き、 新しい

「ああ、逃げ出した様子ですよ、親分」

大きな声 で 怒 鳴 れ 真昼 0 横 山町だ、 逃 げ 了^{ぉぉ} せる わ け は な 11

「御用ッ」

八五 郎 0 蛮声 が、 逃げて 行く幸七とその 女房 0 お 角 0 後 を 追 61

ます。

X

X

を 継ぎま 間 bなく幸七夫婦 た。 清 Ŧi. 郎 は とお吉 処 刑 され が 緒 伝 に 四 郎と な つ たことも言うまで お 延 は 祝言を 7 菊屋

りません。

ŋ ま 大分 経 た。 つ て か ら八 <u>Fi.</u> 郎 0 せが むままに、 平 次は 斯う 説 明

す じ ぐ 7 幸 な に は 嫉らもち 悪 つ 9 た て 11 を 菊 0 野 だ。 焼 屋 郎 だ く 0 よう 花 主 が 人 見 ` 船 か に 恐 ら で折 な ろ り、 金 を引 を 狙 大 智 \Box 出 恵 つ た 0 0 た 廻 が 金 うま をせ が る 奴さ。 だん < し め 行 だ て 女 か ん ず、 房 そ 菊 の 屋を殺 れ お 両 が 嵩っ 角 玉

け 自 下 抱き上げ は 分 な 0 は 腕 11 ったそうだ。 たとき、 逃 だろう に げ 飛い沫ぶ うせた 11 た 真 語 血 の暗な中 と見せる 穾 るに落ちた を 胡ご 4 たか 麻ま で 化加 斬 すた めだ。 のさ」 つ -旦那を たか、 め 伝 右 突 そ 衛 そ んな いて逃げた奴が れ 門を介抱し に幸七は 事まで見え ある 体を わ

エ

たな か つ 0 5 は 傷 0 変だぞ さ け П れ 業 が 11 しょ ば だ 上 ع 力が 向 思 左 左 で 側 側 入 つ た が 胸 5 に 清五 ず、 ょ 11 ^ 真 る ځ 郎 逆手に つ 傷 す で ぐ П 右 持 に ^ 側 突き立 近 つ ٤ が いよう 幸七と聴 刃が つ だ た が の 上 は 11 ^ た時 匕首 向 右 かな を 逆 側 か に ら 手で 居 に る だ 持

は、 あ 島 に そ 疑 行 れ 睨 両 11 玉 か 花 をきせよ って ん だ ら。 見 0 西 e s 船 詰 な に 幸 乗 う 七 ^ 11 船 ح が 9 頬冠む た ょ 向 た 同 ŋ 先 島 勢 細 ŋ に で 工 0 0 は 船 だ 男 来 0 が 0 出る 話 5 で、 れ あ を 橋 な 0 れ を た は 0 11 0 見 上 大縮い 0 は、 下 て、 尻じり 誘 手 さ。 陸を 若 つ は た 日 者 どう 飛 那 若 6 日 0 違 伝 で 那 来 て は 四 郎 7 向

な る ほ ど ね 11

ع

ょ

党 少 な 頭 両 0 0 つ す 持 細 た 金 のさ。 る が 9 工. 0 ことで、 過 入 て お ぎた 行 つ 市 た 忍び を < のを、 ょ 殺 0 返 あ が ん た 本 しを越す な そ 当だ 0 人間 11 0 は く 翌 ら 正 工 そ だ る を か 朝 夫さえ見付 れ 塞さ 直 5 に 持 ぐ 者 通 ヌ た つ ケ で 夜 て め p' 行 ヌ だ 0 ケと 晩 か つ が <u>-</u> れ て 仏 殺 仏 前 ば 様 日 様 間 ま は に 晩 あ とは で を 供 ょ 無 騙だま 置 Ž 尽 つ P す ほ た () で 気 う文 て 五. に は

句はない、 銭形平次も舌を捲いております。 尤も鋸で切る術は考えなかったよ、恐ろしい奴だ」 そして最後に斯うつづけるの

「屋」た。

馬鹿な道楽を少し封じさえすれば」 あんな人間とは付き合 幸七は悪人だが、 殺された伝右衛門もずいぶんイヤな人間さ、 いたく ないな。 伜 の伝 四郎は良 い男だよ、

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあ が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ŋ, ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初 出 「オ ル 讀物」 昭和二十二年二三月合併号 文藝春秋新社

底本 月十五 「錢形平次捕 日初版 物全集」 第八巻 河出書房 昭和三十一 年八

編集·発行 銭形倶楽部